

破璃の降る降る

そのあいだ





夕立、バス停、待ち合わせ



雨が垂れていた。

トタンを打つ雫が音を奏でる。ド、ミ、ラ。不規則な音階は軽快なテンポで頭上を滑る。

梅雨も明けてからの雨。遠くに見えた入道雲が降らせた夕立。バス停には俺ひとりで、ついでにいうところの停留所にはあと一時間ぐらいしないとバスはやってこない。

後ろに控えるのは木々の生い茂った山。田舎の山は神域となり、この地にずっと鎮座してきた。地域開発だかのが犠牲になった隣町の山とは随分違う。鬱蒼とした、真夏でも涼しくなるような山。

雨は地を濡らし、やがて水の流れが俺のつま先にもやってくる。防水のスニーカーだったら良かったと思えど、もはや遅い。突然の夕立は、熱を溜め過ぎる羽目になったアスファルトへの褒美だ。前からは濡れたアスファルトの匂いが、後ろからは懐かしい雨の匂いが沸きたつ。

バス停の小さな屋根。その僅かなテリトリーに身体を収め、雲が去るのを待つ。五分かもしれないし三十分かもしれない。だけどそんなことはどうでもいい。今はただ、雨粒のつくり出すメロディをBGMに空を眺めるだけだ。

「久しぶり」

不意に人影が現れた。顔を上げずともその声でわかる。優雨。俺の優しい幼馴染。

ボロボロのベンチに腰掛けた彼女のセーラー服は雨に濡れて肌に張り付いていた。前髪も額にくっついていて、その滴がこめかみから頬をつたう。

「久しぶり。まただいぶ濡れたな」

雨に濡れても朱がさしている頬。ちょっと困ったような瞳。優雨は「いやだなあ」と照れるように笑って、身体の前を隠すように鞆を抱えた。

「夕立、すごいね」

「そうだな」

そうぼつりとお互い零して、空を見上げた。

雨は好きだ。雨の匂いもその音も。静かに降る雨は特に好きで、よく縁側から庭を眺めていた。雨に打たれて鳴くアマガエル、濡れるのが嫌だと茂みに隠れる猫。

学校帰りに突然雨が降って、優雨の手を引っ張って走って帰ったこともあった。

「ねえ、もう、いいんだよ」

優雨がこちらを見ずに言う。その声は雨に消えて溶けてしまいそうだった。

俺は聞こえなかったふりをして、遠くの空に青空を見つける。



雨が、静かになってきた。トタンを打つテンポがだんだんと遅くなり、目の前に垂れる雫も小さくなってゆく。

もうすぐひぐらしが鳴き出すだろう。日が傾いてもすぐに、地面は乾いて匂いを変えるだろう。

「じゃあ、またな」

古いベンチから立ち上がると、反動でギイと音が鳴った。結局スニーカーには雨が染み込み、つま先は気持ち悪い状態になっている。

「ねえ、もう、いいんだよ」

優雨は再びそう口にした。やっぱり俺は聞こえなかったふりをして、明るくなった世界へと足を踏み出す。屋根のない、晴れた世界に。

わかっている。そう、わかっているんだ。

「あー、おっちゃん！ あとでアイス買いに行くからなー！」

雨がやむのを待っていたのか、近所の小学生が自転車で目の前を通り過ぎていった。その後を彼の弟が走って追いかけている。

「おう、たんまり買っていけ」

その背中に大きな声で言ってやると弟が「一個だけだよー」と兄を追いかけてながら叫んでいた。

雲と雲の間隙から、眩しい太陽が地面を照らす。もう夕刻だというのに、その光は陰ることを知らない。

誰もいないバス停を振り返る。ボロボロになったベンチがひとつだけ、その上に申し訳程度にトタンの屋根が覆いかぶさる。

雨が垂れたその場所は、今でも誰かの待ち合わせ場所だ。



入道雲、きらきら



「あっつーい！」

エアコンをつけてくれない車から顔を出す。温い風が顔を叩いてゆくだけだった。

遠くに立派な入道雲が見える。真っ白だけど綿でも綿菓子でもない。雨を降らすぞーっていう意地悪な集まり。

「ちょっと、青、危ないから顔引っ込めなさい」

運転席の母が前を向いたままそう言った。サイドミラーか、バックミラーか、少なくとも鏡のせいだ。

「だってさ、なんでエアコン切っちゃったわけ？ あっついよー、もうスポーツドリンクも温いしさ」

「お母さんは、この空気が好きなのよ」

思いっきり文句を言ったつもりが、そんなのんきな声でシャットアウトされてしまった。そりゃ確かに普段住んでいる街や途中のサービスエリアよりは涼しいのかもしれない。でも暑いのは変わりなくて、真っ青過ぎる空から太陽は苛めるかのように世界を照らしていた。

仕方なしに、頭をやや引っ込めて窓にもたれかかる。いつもは四人乗るセダンも、今日は私と母だけだ。だから後部座席で思う存分のんびり出来るわけだけど、私の好きな音楽を一曲もかけてくれない車内は、もう充分過ぎるぐらい退屈だった。

かといって小生意気な弟がいても、無口な父がいてもプラスに働くことはなかつただろう。寧ろサッカーの練習だと張りきっていった弟とその面倒を見ると残った父がいない方が、まだ気が楽だろう。

まあある意味プチ旅行には違いない。来たのは母の実家、驚くぐらいの田舎なんだけれど。

ド田舎を出て、都心でも有名な大学を出た母は、入社した広告代理店で父と出会って、そのまま結婚して私を産んだ。仕事を辞める気はなかつたらしく、出産時にもこの実家には帰らなかつたそうだ。

だからなのか、仕事を辞めた今は、時折こうやって車で帰っていた。ちなみに仕事を辞めた理由は、弟が産まれたから。私ひとりならまだしも、ふたりになって、しかもそのふたりめの身体がちょっと弱かったんだから仕方がない。もっとも、今は体力もついて、元気にサッカーなんかしてるわけだけど。

まあ今更文句は言わない。ときに夜間保育に預けられ、小学生になったらすぐ鍵っ子になった

ことなんて。晩ご飯はいつも簡単なメニューで、うちの母は料理が苦手なんだと思ってた子ども時代のことなんて。



そんなわけで私がここに来た記憶があるのは一番古くて十歳のときのものだ。つまり五年前。本当はその更に五年前にも来てるらしいのだけれど、生憎あまり覚えていない。たぶん初めてきたおばあちゃんちというやつに緊張しっぱなしだったのか、つまらなくて寝てばかりだったのか。どちらもありえる。

十歳の頃を覚えてるのは単純にそう昔じゃないからというのものもあるけれど、そのときは弟が一緒だったからだ。当時二歳。おばあちゃんたちがみーんな弟に夢中で、かまいつきりで、私はひとり山道を散歩したっけ。

「あ」

「何、どうしたの」

記憶を掘り起こしていたら、ちょうど懐かしい山が見えてきた。名前は知らないけれど、確かみんなが天狗の山とか言っていた小さな山。どうしてそういうのかはわからない。おそらくそんな伝説でもあったのだろう。山のとっぺんが二股になっているから、遠くからでも見たらわかる。

思わず拝んでおいた。その姿に母が笑い出す。

「そういう律儀なとこ、ほんと ^{なつゆき}夏由にそっくり」

「いーの。森のおばけには挨拶しておかないと」

じっと、手を合わせて三秒。次に目を開けたときには天狗の山は大きくなっていた。鳶がその上をくるくると風に乗っている。奥には入道雲。

いつまでも変わらない、夏の景色だ。

ここにある変わらないものは、いい。気持ちがいいし、ほっとする。

「ねえ、お母さん」

窓にふたたび持たれて、温い風を浴びる。

「なあに」と母は答えたような気がしたし、ラジオから流れる曲に合わせて鼻唄を歌い始めただけのような気もする。

「今日は、夕立かな。入道雲が、きらきらしてる」



わらびもち、かき氷



七夕商店。そんなボロい看板を掲げたのが、俺の職場だ。

俺の店ではない。あくまで職場。店を構えたのは記憶に薄い祖父だし、親父は早々にこの世から引退してしまった為、その後は母親が店を経営している。

変な名前の店だ。由来は祖父が七夕好きとか七が揃って縁起がいい日だとか色々聞いていたけれど、大方祖父の初恋の相手がナナとかナナコとかそんな名前だったんだろうと思っている。ちなみにその話は祖母から聞いた。だからきっと当たりだ。

小さな集落の、小さな商店。食料品から日用雑貨、漫画雑誌まで。なんでも置いていて、何も揃わない店。それでも営業できるのは、他に買い物をするとこがあまりないからだが、生憎今では車で行ける距離にそこそこ大きなスーパーマーケットが出来てしまった。品揃えも値段も敵うわけがない。今ではただの昔懐かしい個人商店だ。

それでも死なない程度に生きていけるのは、商魂たくましいというか何事にも豪快な母のおかげかもしれない。今では車で買い出しに行けない年寄りたちの御用聞きもやっている。まあそれを聞いて配達して回るのは俺なわけだが。

「夏由、藤井のおばあちゃんが、わらび餅食べたいだつてさ」

近所の子どもが注文してきたかき氷を削っていると、いい意味で年を取らない母が店の奥から出てくる。電話の子機を持っているから、きっとまだ繋がっているのだろう。

「ああ、わかった。あと五分ぐらいしたら行くって言って」

これまた古びた手動のかき氷機で出来た氷の山にいちごシロップをかけてやる。遠慮のない子どもは「もっともっと！」と声をあげる。

俺の伝言を藤井さんに伝えた母は、そのまま一旦奥に戻ろうとして、立ち止まった。

「青ちゃんって、わらび餅好きだったっけ」

俺の方を見て言ったかどうかはわからない。俺は次の氷を急いで削らなければいけなかった。そうしないと、兄弟の間に差が生まれてしまう。

「さあな。嫌いじゃないんじゃないか。姉さん好きだろ」

弟のかき氷を横からつつきそうな兄を諫めつつ、ハンドルを回す。氷も俺も、汗をかいていた

。

母は「そうよね。じゃあもっと作っておこうかしら」と独りごとのように言ってから、サンダルをカタカタ言わせ今度こそ奥へと消えていった。



そういや今日は姉さんが来るんだったな、とそれで思い出した。なんとも薄情な弟だ。何があったか朝からやけに張り切っている母を不思議に思っていたが、孫と一緒に来るんだったらそれも納得出来る。

新しい氷の山にブルーハワイをかけてやる。弟はなんとか自分の分を守りきったみたいだ。兄は嬉々として青いかき氷を受け取り、すぐさまかきこんで、お決まりのように顔をぎゅうっとさせていた。

仕事を終えて空を仰ぐ。首からかけたタオルで額の汗を拭く。今こそ俺が輝くときだと言わんばかりの太陽が緑も茶色も眩しいぐらいに照らしていた。

青い空に入道雲が見える。今日も夕立が来るだろうか。

「夏由、ほら、わらび餅持ってって」

奥から母の声が聞こえた。近くに置いていた麦茶を飲み干し、返事をする。いつの間にか兄弟は店の前を離れ、かき氷を吸いながら家へと向かっていた。

「そうだ、藤井さんとお孫さん、今度大学卒業だってよ」

小さなタッパーが入った袋を寄こしながら、母は含み笑いをして見せる。

「昌樹ってもうそんな年だっけか」

「馬鹿、潤ちゃんよ」

わざと言ってやったのに、母は遠慮なしに肩を叩いてきた。

「大学卒業って、二十二とか三だろ」

「学生が終わったらみんな一緒よ」

そんな暴論を当然のように吐く母に「はいはい」とだけ答えて、袋を片手に店を出た。

日差しが痛い。藤井さんの家はそう遠くないと、自転車にまたがった。前かごに母ご自慢のわらび餅を入れる。

のんびりこぎ出すと、温い風が髪を揺らした。眩しい光が肌を焦がす。蝉がどこまでもついてくる。

夏だ。当たり前。

でも夏が来るたび、夏だ、と思う。



扇風機、かたかた

レトロといえば聞こえはいい。そんな店の横に停めた車から降りると、むわっとした熱気が身体中を襲ってきた。

「ただいまー」

母の伸びた声。不思議だけど、このフレーズは、母を娘だと思わせてくれる。母もおばあちゃんの子どものものだ、ここで育ったのだと。

「はいはい。おかえり。青ちゃん、いらっしゃい」

おばあちゃん、というにはいささか若い女性。それがおばあちゃんに対する私の印象だ。顔に相応の皺はあるけれど、背筋はまっすぐだし化粧も古くない。今日はデニムを履いているんだから驚きだ。この店に合わせて言うならばハイカラってところだろうか。

お決まりの挨拶をして、家へと入るべく母に続く。といっても入り口は店と一緒に、レジの横で靴を脱いで座敷に上がる。

「あ、かき氷」

店先に置かれた鉄色の機械を見て思わず呟く。

「青ちゃん、食べる？」

おばあちゃんが振り返って聞いてくれた。正直に言うと食べたかったわけではない。アニメ映画で見た機械がそこにあったから、思わず口にしてしまっただけだ。

「夏由、今ちょっと出てるから。帰ってきたら削ってもらって」

だけど私の返事を聞くことなく、おばあちゃんは話を進めてしまった。別に嫌じゃないけれど、私の好きな宇治金時はここでは食べれまい。いちごかメロンかブルーハワイ。いいところ、練乳があるか否か。

まああのケミカルな味も悪くない、とサンダルを脱いで畳に上がると、ひんやりとした心地良さが足の裏から伝わってきた。

おばあちゃんちには、クーラーなんてない。これまたレトロな扇風機が音を立てて回っているだけだ。

それでも大きな窓があるからなのか、庭に小さな池があるからなのか、不思議と家の中は涼しかったりする。風がよく通るからなのかもしれない。ちりんちりんと、風鈴は常に歌っている。

「暑かったでしょう」

座敷に腰を下ろし、足を延ばす。この家でだけは母も「行儀が悪い」とは言わない。だって母も同じように足を延ばして座っている。

お盆を持ったおばあちゃんが手際よくグラスに麦茶を注いでくれた。氷がからんと音を立てる。あわせたかのように、池の鯉が音を立てて跳ねた。



「んー、まあでもやっぱり夏だわ」

実家、というものに帰ってきた母は、そのまま畳の上に転がるんじゃないだろうかというぐらいいりラックスしているように見えた。仕事をしていたときとは大違い。

「ほんと、あんたたち姉弟ね」

おばあちゃんはそう笑いながら、私の前に小皿を置いてくれた。きな粉がかかったそれはわらび餅だ。横に黒蜜が入ったつけ皿も置いてくれる。

「似てないわよ。私は母さん似。夏由はどう見ても父さん似でしょ」そう言う母は目ざとく私のわらび餅を見つけ、自分も食べると主張していた。

「あんたのその威勢の良さを、夏由に半分あげれたら良かったのに」おばあちゃんは笑いながら、用意してましたと言わんばかりに小皿を母の前にも置いた。

おばあちゃんちに来ると、私は無口でいることが多い。今も黙ってわらび餅を食べながら、ふたりのやり取りを聞いていた。残念ながら私には似てるか否かのジャッジは下せなかったし、夏由おじさんが威勢のない人だという判断も下せなかった。

わらび餅は竹楊枝で刺せばぷるんと弾力があって、口の中では溶けてしまうから不思議だ。きな粉と黒蜜が混じった甘さがまた美味しくて、たっぷりつけてゆっくりと堪能することにする。

「晩ご飯、手伝おうか」

喋りながらとは思えないスピードでわらび餅を平らげた母が言う。

「今日ぐらいゆっくりとしきなさい。明日から手伝ってもらうから」

祖母はその皿をお盆に乗せ、自分も麦茶を飲んでから立ち上がった。その際ちらっと私を見た気がするので「晩ご飯、なんですか」と聞いてみる。

「ちらし寿司作ったの」おばあちゃんにはっこり自慢げに笑って答えてくれた。しかしそれにいち早く反応したのは母で、私は心の中でガッツポーズをするに留まった。

「ほんと、夏ね」

おばあちゃんが消えた座敷で母が零す。私は頷くこともなく、わらび餅をまたひとかけら、口に放り込む。

「明日、父さんの墓参り行かなきゃ」

口の中で溶ける。甘さは残る。

どこか遠くをぼんやり見つめた母を、扇風機がかたかたと応援していた。



風鈴、うちわ、蚊取り線香



風呂上がりに縁側は、思えば父親と同じだ。紫陽花の絵が書いてある団扇を片手に、蚊取り線香をすぐ横に。これでビールまで持ち出したら、もはやそれは親父だ。

向かいの和室からは母と姉の声が聞こえていた。普段俺とふたりだけの生活だから、娘と孫が来たのは嬉しくて仕方がないのだろう。布団を敷いて蚊帳を張る。そんな作業もきっと楽しいに違いない。

正月以来の姉は、何も変わっていなかった。あえていうならば、やはり少しずつ性格が丸くなってきている気はする。母に似て、働くことが大好きだった姉は、俺と違いいい大学というやつを出て、給料のいい会社で働いて、いい旦那さんをつかまえて、今では立派な母親になった。仕事を辞めた頃から、とげとげしきは徐々になくなってきている。

それに比べて女の子ってものは、たかだが数ヶ月会わないだけで激変したとってしまうから不思議だ。高校生になった姪っ子は背伸びをしたのか髪の毛を少し明るくして、それなりに化粧も覚えているみたいだった。

俺がその頃には、そんな風に思ったことはなかったのに。ということは、俺がそれだけ歳をとったということだ。

その姪っ子は今ひとり。座敷でテレビを見ている。弟と一緒に来なかったことを寂しく思うのだろうか。もし姉と似ていたならばきっと思っていない。だが正直、姉に似ているとは言い難い。どちらかと言えば、義兄似じゃなからうか。

まあどちらにしても、こんな何もない田舎、子どもひとりじゃつまないだろうとは思う。かといって俺も付き合えるほど若くもない。それに普段あまり会わない男親戚じゃ、あの年頃の子は話しづらだろう。

ちりん、と風鈴が鳴る。今日は雨は降らなかったが、夜は割と涼しく感じる。空を見れば星も月も明るかった。明日もまた晴れるだろう。

団扇で仰いでいると、縁側が鳴った。ミシッという音に母かと思ひ顔を向けたら、パジャマ姿の姪っ子だった。

「あ……」

俺がいると思わなかったのか、彼女の動きと口が止まる。食事の際もほとんど言葉を交わしていないから、もしかしたら苦手だと思われてるのかもしれない。

「ああ、かき氷食うか？」

もしかしたらちょっと洗面台に行きたかったとか、寝ようと思って移動しようとしたのかもしれない。だが夕方の母の言葉を思い出し、思わず俺は聞いてしまった。



一寸、彼女は困った表情を見せて、無言でこくりと頭を振った。これじゃ気を遣ったのか遣われたのかとても微妙だ。

「駄目よ、こんな時間に冷たいものなんて」

向かいの縁側に姉が立っていた。風呂にでも行こうとしたのか、バスタオルを抱えている。

「え、別に」

姪っ子は俺より先に反論しようとした。だが、ちらっと俺を見てその口を閉じてしまう。

「そんなに食わせねえって」

その顔が不服そうだったので、俺はこっちの舟に乗ることにした。本当は食べる気がなくなつて、周りに、特に親に反対されると気持ち良くないだろう、たぶん。

姉は渋い顔をして、加えて俺をきっと睨みつけてから「ちょっとだけよ」と了承の意を口にした。そして自分はそのまま縁側を渡り、風呂場へと向かう。

姪っ子に顔を向けると、ちょっとだけ誇らしげな顔をしているように見えた。俺が見てることに気づいたのかこちらを見ると、恥ずかしそうにはにかんで、頬を赤く染めた。

やっぱ、女の子だよな。

そう思いながら立ち上がる。何味がいいか聞いてみると「なんでも」と答えられてしまった。聞き方を間違えたらしい。

「かき氷で一番好きなのってなんだ？」

改めて聞いてみると、彼女は目を丸くさせてから瞬きを繰り返した。それでもう一んと少し考える様子を見せてから「宇治金時」と小さい声で答える。

渋い。ちょっと予想外の答えだ。でもマンゴーとか言われなくてもいい。

「でも、えーといちごで」

答えに面食らっていると、何を察したのか彼女は照れたように笑いながらそう言った。

「宇治金時は？」

いちごとはだいぶ方向転換してるぞ、と聞いてみるとまた笑ってみせる。

「いや、だってないかなーって」

この歳で遠慮を覚えなきゃいけないほど、世の中って世知辛いものなのか、と思わず感じてしまった。

「いや、出来る」

「え!？」

その反応は早かった。あまりにも予想外だったのだろう。こんな田舎のボロい商店で宇治金時が出てくるなど。

「おふくろ……ばーちゃんが餡子とか作ってるからな。白玉もあるだろ。夏はあんみつとか、配達してるんだ、これでも」

そう説明してやると、姪っ子の頬が桃色になってゆく。今の若い子はそういった物より洋菓子が好きかと思っていたが、どうやらそうでもないらしい。

「ちょっと待って。それとも店まで来るか？」

ついていく、と少女は答えた。この様子だと、わらび餅も喜んで食べたのだろうか。明日あたり、あんみつか葛きりを用意するよう母に言っておこう。

放置していた蚊取り線香を片手に、俺は店へと降りる。風に乗って煙が、夏の香りを店に運んだ。



遠雷、ごろごろ



昼ご飯はお蕎麦だった。おばあちゃんの手打ちだという十割蕎麦は、今まで食べたことないぐらい濃い味でとても美味しかった。ちっとも噉れないのが難点だけど。

でもデザートに葛きりまで出てきたのだから、大満足。昨夜は宇治金時、今日は葛きり。とくに行くところも遊ぶところもない田舎だけど、店に行かなくてもそういうのが食べれるのは幸せかもしれない。

といっても、さすがにおばあちゃんちで一日だらだらしているのは暇で。テレビだって観たいのがあるわけじゃないし。

弟の携帯ゲーム機を奪ってきたら良かったのか、と思いつつ、私は水筒片手に散歩に出てみることにした。母の助言で少し日が傾いてからにしたけれど。

それでも、おじいちゃんのお墓参りに行った朝よりもずっとずっと暑かった。

七夕商店、という小さな店は、すごーく暇、ということもないみたいだった。小学生がアイスを買いに来て、部活帰りなのか同年代ぐらいの子たちが飲み物を買いに来て、小さな子どもを連れてお母さんたちが野菜を買に来る。プラス配達もしているらしく、店に立つおじさんはそれなりに動きまわっていた。

おじさんとは、もう少し話をしてみたいんだけどな、と思ったりするものの、どうやら日中にその願いが叶うことはなさそうである。

母より五つばかり若いおじさんは、案外いいひとだった。

子どもの頃の記憶なのか、なんとなく怖そうなイメージがあって、ちょっと話すのは苦手かなと思っていたものの、話してみたらそんなこともない。

寧ろ父より話しやすく感じてしまう。それは父さんが無口過ぎて相槌すら反応が返ってこないことがあるからかもしれないけれど。

私の学校の話聞いてくれたり、自分が高校生の頃の話をしてくれたり。勉強の話も部活の話も、それなりに楽しんで出来た気がする。まあもしかして、姪相手に奔走していたのかもだけど、それでも退屈しなかったからそれでいい。

それに、おじさんは進路の話とか、しなかった。母と比べられることもなく、のんびりと私の話に耳を傾けてくれた。

アスファルトを離れ土の道を進む。目的は特になかったから、なんとなく天狗の山へと向かっていた。そう遠くもないし、迷うような道でもない。

まあ、昔は迷ったんだけど。苦いような甘酸っぱいような記憶が蘇ってくる。十歳にもなって迷子になって途方に暮れたときはさすがに泣きたくなった、自分に対して。



誰ともすれ違わない田舎道。脇には名前の知らない花が咲いていた。名前がわかる野花なんて蒲公英とシロツメクサがいいところ。知識のなさは悲しいけれど、普段見かけないんだから、図鑑なんかで見たとしても名前を覚えられるはずもない。

そうやってしばらく歩いていると、またアスファルトの道に戻った。こちらへんにしては珍しい二車線の道路だ。確かバスが通っている道のはず。バスといっても、一日に何本レベルだった記憶がある。だから一度も乗ったことがない。

この道を少しゆけば、天狗の山だった。そこまで行って引き返したら晩ご飯はもうすぐだろうか。

ゆらゆらと陽炎の昇るアスファルトを歩いて行く。少し雨でも降れば気持ちいいのに、と思った瞬間、遠雷が耳に届いた。

一瞬、自分って超能力者なんじゃないか、とかいう馬鹿なことを想像する。もちろんそんなことはない。私は天狗でも森のおばけでもない。その両者が天候を操れるのかどうかは知らないけれど。

雨が降る匂いがする。風が湿っぽい。雷がまたひとつ。夕立の気配だ。

傘なんて持っているわけがない。小さな鞆と水筒ひとつ。大きな道路とはいえ、周りに建物があるわけでもない。しかたなしに、森に向かって走ることにした。あれだけ木が密集していたら、少しぐらい凌げるだろう。夕立ならば長い間降り続けることもきつとない。

雨が降り出す前に、というのはどうやら無理らしい。ぽつり、と鼻の頭にあたる。ぽつり、右の頬に当たる。あとはもう、一気だった。

夏の雨というのは嫌いじゃない。地面に溜まった熱が冷まされてむわっとくるのも嫌いじゃない。でも、濡れるのだけはやっぱり気持ちが悪い。

慌てて走って、サンダルが濡れて滑りそうになって危機一髪。脱げそうになったそれをなんとか履き直して、二度と滑らないように擦るように走る。

道路の隣はすぐ森なのに、フェンスがあって入れなかった。フェンス沿いに走って数秒、目の前にバス停が見えてくる。

良かった、と思った。小さなバス停だけ屋根がある。ここで通り過ぎるのを待とう。そう思ってトタン屋根の下に滑り込んだ。

幸い鞆の中は濡れていない。ハンドタオルを取り出して顔を拭く。

雨は、すごかった。勢いを増し、アスファルトを白くする。あんなに晴れていたのに、天気っ

て不思議だ。

早く止まないかな。晴れたら服も乾くのに。

そう思っていたら、バス停に私と同じ子が現れた。突然の雨に走ってきたのだろう。セーラー服が濡れて、二の腕に張り付いていた。

「大丈夫？」

私よりもだいぶびしょ濡れの女の子に声をかけてみる。するとその子は丸い目をさらにまんまるにさせて「大丈夫」とやわらかく微笑んで見せてくれた。



さくら、あじさい、ひまわり



「さくら、ふるふる」

学校からの帰り道。上機嫌だった優雨はそんなことを口ずさみながら桜吹雪の中を通っていた。

。

対して俺は、バスケットボールを続けようか否かで迷っていた。中学までは歩いて通えたものの、高校はさすがに無理だ。一日に数本しかないバスでなんとか通うことになる。部活動を最後までやってしまうと、最終バスに間に合わない可能性が出てくる。かといって毎度早めに上がるのも、それはそれでなんだか気持ちがよくない。

下宿、という手もあった。だがそうになると、家の手伝いが出来なくなってしまふ。母ひとりではやはり心配になる。姉貴が戻ってくることもあるまい。

それに、優雨はきつとここから通うだろう。

「さくら、ふるふる」

嬉しそうな声が風に乗る。優雨は花が好きだ。自分でも育てていたし、山や道端の花を摘んでは飾っていた。そういうことをさりげなく出来る彼女が、俺は好きだ。

「なあ、それなんの歌だ？」

セーラー服のスカートがふわっと舞っていた。くるっと回った優雨は「うーん」と暫し首を捻ってから「ふるふる？」と答える。

「疑問形で答えるなよ」笑い返すと、彼女も笑う。

淡い、雪にも似た桜色。花びらが風に舞い、宙で踊って地面へと着地する。日本人は咲いてもすぐに散ってしまうこの儚さを愛でた、なんて良く聞くけれど、花だけが一気に木を染めて、豪勢に花吹雪になるんだから、それだけで充分愛でる理由になると思う。

第一、すぐ散るのが儚いなんていうのは、人間の基準だ。

「さくら、ふるふる」

優雨は再び歌いだす。さくらの絨毯の上を軽やかなステップで進む。まだノリのきいたセーラー服がその度に揺れた。

彼女はふっと舞い落ちる花びらをひとつかみして、その一枚を唇に乗せた。



梅雨になると優雨は、お気に入りの青い傘を片手にバスへと乗った。雨の降らない日も、だ。その姿は同級生に奇異に映ただろう。だけど俺は、その傘が中学のとき亡くなった優雨のおばあちゃんのプレゼントだということを知っていた。

彼女の祖母は、その傘を大事に使う優雨を見てとても喜んでいたので。六月の雨の日、眠るように逝ってしまった祖母のことを想って、彼女は傘と毎日を共にする。

「今年も紫陽花、きれいだね」

どんよりとした雲の下、優雨はそう言って道端にしゃがむ。視線の先には青い紫陽花が並んでいた。

「あれ、去年と色、違くないか」

「そう？ あ、誰かが何か埋めたのかな」

「何をだよ」と言ってみると「えーと、アルカリ性のもの？ あれ、酸性？」と優雨が首を傾げる。

「青になったんなら、酸性だろ。だけど土の酸性度で絶対決まるわけじゃないからな」

「えー、そうなんだ。小学校のときそう習ったのに」

「あと毒があるから間違っても食うな」

「わ、食べないよ。ひどいなあ」

「桜の花びら食ってたくせに」

俺がそう言うと、優雨は頬を膨らませ顔を背けてしまった。

ぽつり、葉を叩く音がする。

顔を上げると、鼻の頭を雨が直撃した。「降ってきたか」俺がそう言うと、優雨は慌てて傘を開く。

青い、青い、空のような、紫陽花のような傘。

「雨って、綺麗だよな」

折り畳み傘を鞆から出したときには、優雨が俺のことも傘に入れてくれていた。しゃがんだまま、そう大きくはない傘にふたり。

「こうやって溜まっているのを見ると、ガラスみたい」

傘の先にいまにも落ちそうになる雫を見て、彼女はそう言った。雨をガラスだと思ったことはない。だけど優雨は、いつもそういう発想をする。そんな彼女が、好きだ。

「まあガラスが降ってきたら、俺たち血まみれだけだな」

「えー、ちょっと夏それ台無し！」

そう言ってやると、優雨は唇を尖らせて立ち上がってしまった。「もう、早く帰るよ！」その

まますたすと歩いて行ってしまう。

深呼吸、ひとつ。

俺は自分の折り畳み傘を開いて、その青い後ろ姿を追った。



家の庭にひまわりが咲き始めた。すぐ近くの優雨の家にも咲いている。確かこれは、幼稚園のときにもらったひまわりの種の十代目とかだ。

最近優雨は、高校に入ってから出来た友達と手芸を始めたらしい。もともと不器用ではないから、色々出来てすぐにのめり込んだのだろう。新しいビーズのアクセサリやコサージュを持ってきては、嬉しそうに制作過程を語っていた。手芸のことなど何もわからないが、何かに夢中になっている優雨のことを見ているのが楽しかったから、それで良かった。

商売根性たくましい母がその作品を見ては「うちで売ろうかしら、これだったら売れるんじゃないかしら」とか言いながら乱入してきて、その度に優雨は「まだまだですよ」とはにかんでいた。でもその顔はやっぱり嬉しそうで、いつか並べてみるのも面白いのかな、とか思っていたりもした。

「いつか、夏にも作ってあげるね」

それが彼女の口癖。もちろん、俺は期待せず楽しみにしていた。

俺は美術部に入っていて、最近は毎日最終バスぎりぎりまで学校に残り絵を描いていた。作品展の締め切りがもうすぐだった。

バスケットボールはやっぱり好きだ。でも地方の公立校とはいえ、遊びでやっているような部活ではなかったから諦めた。文化部ならば活動時間にさほど気を遣わなくてもいい。ゆるい感じの中に、個々の情熱があるこの部活は入ってみたら案外楽しかった。もともと絵を描くのも好きだったから、結構自分には合っていたのかもしれない。

が、やはりバスというものは重要で、逃せば色んなところに迷惑をかけてしまうのは百も承知だった。それでもうっかりしてしまうことはあって、俺は時計を見て慌てて校内にある公衆電話に走った。

結局、近所のおじさんが迎えに来てくれることになって、俺は校門のところでその車を待っていた。しまったなあ、と空を見上げると、雨雲が風に乗ってやってきていた。

夕立か。そう思って木陰に入る。蝉の鳴き声が弱まり、代わりに遠くで雷の音が聞こえた気がした。風が温い。土の匂いが変わる。

迎えの車は、どんなに待っても来なかった。

俺は心配してくれた担任に送ってもらい、誰もいない家へと帰り着いた。軽く濡れた制服を脱ごうとして、茶の間の電気を点ける。

テーブルの上に、走り書きのメモが残されていた。

どうやら、夕立は、その一瞬で、大切なものを持って行ってしまったらしい。



雫、ぽたぽた



セーラー服の女の子とふたり、ベンチに座って雨が終わるのを待っていた。
ボロボロのベンチは正直言っていっぱ壊れるんじゃないかと不安になる傾きっぷりだ。

「ねえ、ここら辺の子……じゃないよね」

無言は気まずいのか、女の子が話しかけてきてくれる。どこかで見たことがあるような気がするのには気のせいだろうか。

「あ、うん。七夕商店、あそこの孫」

同い年ぐらいだよなあ、と思って私は変に畏まらないようにして答えてみた。

「あ……そうか……なくなったね」

だけど彼女の言葉は聞き取れなかった。「何？」と聞き返すと「ううん。なんでもない」と笑顔で終わらされてしまった。

「おばあちゃんちに来たの？」

「そうそう。それで暇だったから散歩してみたんだけど、結果、これ」

まだ止みそうにない空を見上げる。穴の開いたトタン屋根から雫がぽたぽたと垂れていた。明るかったはずの空は、ほんの少し暗さを増して、山を覆っていた。

「ねえ、あそこのおじさんって、まだお店にいるのかな」

「え？」

彼女の声で、地上一メートルに意識を引き戻される。右を見ると、濡れた顔も髪も放置したままの彼女が少し困ったように笑っていた。

「おじさん、ってえーと夏由おじさん？」

その名を出すと、女の子は可愛らしい目を細めて「うん」と頷く。

「夏由おじさんなら、今日も働いてたよ。お店はほら、まだまだ閉まらないだろうし……雨止んだら来る？」

どういう質問なのか、いまいち意図が掴めなかった。今お店にいるのかと言われれば、そうかもしれないし配達に出ているのかもしれない。今もなお働いているのか、というならばその答えはイエスなのだけれど。

「ううん、いいの。あのね、そのおじさんに届けものしてくれるかな」

疑問符を頭に浮かべたままでいると、彼女は首を振って、それから鞆の中に手を入れた。

「届けもの？」

自分でしに行かない理由は何、と聞きそうになって、ちょっと堪えてみた。もしかしたら私が踏み込んじゃいけないような事情があるのかもしれない。例えば歳の差恋愛とか、隠し子とか...
...いや、なさそうだけれど。



「これ。渡して欲しいの」

学生鞆から出てきたのは、青いミサンガだった。

「これが切れたら、もういいんだ、って思ってって」

そして不思議なことを言う。

「伝言？」

「そう。それだけでいいから。お願いしても、いい？」

彼女がほんの少し首を傾げる。

「え、うん、それはいいんだけど、自分で渡さなくていいの？」

確認してみると「うん」と彼女は頷いた。

「独り言だと思って聞いて」

そして私から視線をずらす。

「きっとね、私が渡したら、素直に言えないから。嫌なのに、我慢してそうしなきゃいけないって言い聞かせて、ほんとうのことが言えなくなっちゃうから」

ふっと、彼女は気が抜けたように、本当にほっとしたように笑った。

どうしてだろう。

なんだかよくわからないのに、了解しました、しっかり伝えてきます、っていう気持ちになっ
てしまう。

「雨、止みそう」

私の返事を聞かずに、彼女は空を見上げた。一拍置いて私に向き直って「お願いね」とその手のひらからミサンガを受け取る。

私はただ頷いて、それを大切に鞆にしまった。

蝉が、待ってましたと言わんばかりに一斉に鳴き出す。

「私、帰るね。ちゃんと伝えるから」

もしかしたら結構な時間が経ってしまったかもしれない。まだ空は明るいけれど、あまり遅くなつては心配をかけてしまう。

「うん。気をつけてね」

座ったままの彼女にさよならをして、バス停から外の世界に出た。

「もう道に迷わないよね、あおぞら青空ちゃん」

その声は温い風に溶けて、消えた。

振り返っても、誰もいない。私の名前を呼んだ女の子が、確かにここにいたはずなのに。

「森のおばけだ」

その言葉が自然と口から出てくると、なんだか急に泣き出しそうになってしまった。



迷子、おばけ、姉弟

「ねえ、青まだ帰って来てない？」

店先にのんびり座っていると、姉の声が後ろから聞こえた。母が「まだじゃないの」と答えている。

「ちょっと夏、探してきてよ」

ところがどうやらそれは母に対しての質問ではなかったらしい。サンダルを引っかけてわざわざやってきて隣に立ち、そう命令してくる。依頼じゃない、命令だ。

「まだ五時だろ。大丈夫だって」

近所の小学生ですら虫取り網か釣り道具を持って走り回っている時間だ。高校生になった姪っ子ならば、まだまだ昼間のうちだろう。

「何を根拠に。ここは青の知ってる土地じゃないのよ」

「いやでもさすがに道は迷わないだろ……あ」

そこまで言って昔のことを思い出す。

「だから心配なのよ」

姉はそう言って、落ちつかせるかのように自分を抱き締めた。

あの姪っ子は、五年前ぐらいに迷子になったことがある。確か家族みんなまだ小さい弟に夢中で、拗ねたのかつまらなかつたのか、ふらっと外に出て行ってしまった。俺はちょうど配達中で、店番を頼んだにも関わらず店先には誰もいなかったらしい。人が来ればすぐわかる、その田舎の良さが裏目に出た。

家族総出どころか、近所の人も総出であちらこちらを探しまわった。姉は身体の弱い息子の面倒を見る為、プラス家に帰ってくる可能性の為に家に残っていたが、その顔は蒼白で今にも倒れそうだったのを覚えている。

結果彼女は、けろっとして帰ってきた。そんなに遅くもならなかつたはずだ。日が落ちる前には間であって、姉は必死に近所の人たちに頭を下げていた。まあ日ごろ母の人づきあいの良さがあるから、みんな良かった良かったと笑って終わった。

「あのときは、なんだっけ」

外を見つめる姉に問いかける。

「森のおばけ」

それだけで理解してくれたらしく、姉は素っ気なく言った。

姪っ子は繰り返したのだ。「森のおばけが助けてくれた」と。家族はみんな観たばかりのアニメ映画に影響されてるんだな、と思って話半分に聞いていたが。それでも彼女は十歳なりに大冒険をしてきたのか、みんなが構ってくれたのが嬉しかったのか、今までに見たことのないぐらいの笑顔で、大きな声でずっとそのことを喋っていた。



「じゃあ……いや、というかそもそもどこに行ったのか知ってるのか」

また森のおばけが助けれてくれるさ、と言おうとして飲み込んだ。そういう冗談を言っても今は通じないだろう。

だが姉は何を思ったのか「助けてくれるといいんだけど、今でも感謝してるし、あの子は」と言い出す。そして「知るわけじゃない」とこちらに向き直って吐き捨てた。

「だったら何で散歩に行かせたんだよ。不安なら行かせないか一緒にいったら良かっただろう」

「すぐ帰ってくると思ったのよ」

「だったら待っててやれよ」

「待ってても帰ってこないから心配なんでしょう！」

「もう十五だろ、そんな」

「十歳だろうが十五歳だろうが、青は私の子どもなのよ！」

しまったな、と思ったときには遅かった。姉は自分の熱で顔を赤くし、自分の爪で二の腕を握り締めていた。

俺には子どもがない。だからきっと姉のその気持ちはわからない。親心なんて湧くわけがない。

けれども、だ。

「あんたが子ども扱いしてたら、青ちゃんいつまでたっても大人になれないわよ」

口を開きかけたところで、奥から母の声が聞こえた。それはちっとも緊張感のない、のんびりした声。

「小さい頃にかまってやれなかったのを後悔するのはあんたの勝手。青ちゃんに押し付けるものじゃないよ」

母の言葉は俺が言おうと思っていたこととほぼ同じ。だけど他人の声で聞くと、予想以上に重たかった。

それでも「だってよ」と中途半端な声で言ってやると、姉はきつい眼差しでこちらを睨む。

「その言葉、あんたにそっくり返してやるわよ」

それが痛かったのは、姉も母の言葉を理解してなお、発した言葉だからだ。

「優雨ちゃんのお墓、あれ、あんたでしょ」

姉は多くを言わず、言及せず、眉根を寄せたまま外へと出て行った。

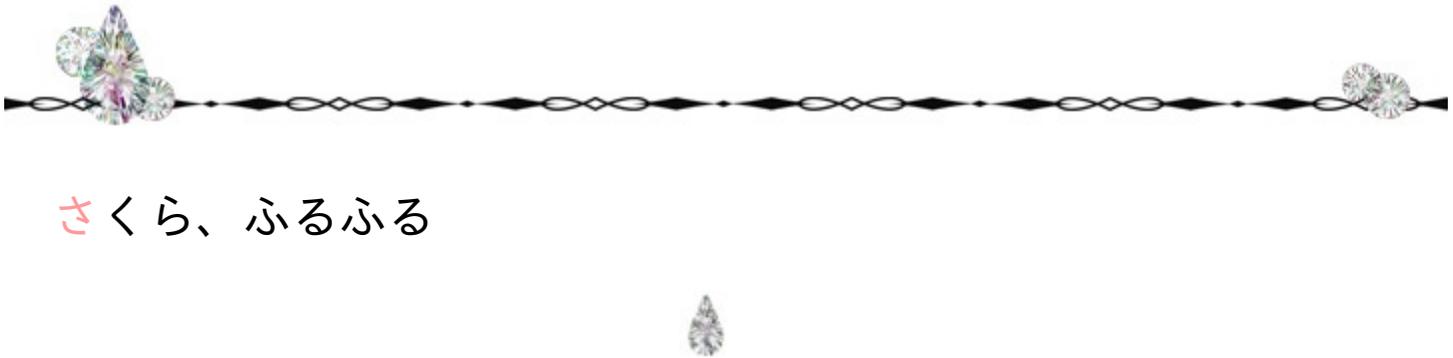
追いかける気など、起きるはずもない。

わかっていても、自分以外からそれを言われては、さすがに身体が重かった。足は地面に張り付き、頭は重く心が叫ぶ。

姉が全てを知っているとは思えない。だがその言葉が重いのは、今でもバス停に行けば会えるという事実があるからだ。

「涼子も夏由も、ほんと似てるのよ」

のんきな母の声が、蝉の声に溶けて消えた。



さくら、ふるふる

高校の入学式は、なんだか味気なかった。

あれだけ勉強しろ勉強しろ言われて、頑張っただけ希望校に入学できたにも関わらず、嬉しさも感慨深さも、何も、何も浮かんでこなかった。

唯一思ったのは、三年間この制服かということ。近所でもそれなりに可愛いと有名だったブレザーだったけれど、似合う似合わないかはまた別の話だ。

まあそもそも、誰の希望校なんだ、って話。

校門の脇には立派な桜が鎮座していて、風が吹いては淡いピンクの雪を降らしていた。おかげで校門前は絨毯が敷いてあるみたいで、それはちょっと綺麗だった。もっとも、すぐに踏みにじられて色濃く、石や土と混じるんだけど。

担任の先生、普通。クラスメイト、普通。別段目立つところもなければ、悪いところもない。その他大勢って言葉がぴったりで、漫画や小説なら主役どころかサブにもなれない感じ。もちろん私を含む。

中学校の友達は幾人かいた。初日はその子たちと共に行動し、ちょっと寄り道をして帰って終了。これが華やかな女子高生生活の始まりかと思うと、本当、誰のための人生なんだろうって感じ。

終わりよければ全て良し、っていうのは何についてだっけ。そんなことを感じながら、スタートした高校生。

綺麗なのは校門の主だけ。でもそれも入学して数日で全て散ってしまった。

その後私はみんなと同じスピードで友達を増やしていき、無難にテニス部に入り、浮きもしなければ中心にもいけないポジションに当然のごとく収まった。早い子は既に恋人を作り、髪を染めピアスを開け、女子高生って感じになっていたけれど、背伸びした感じは否めなかった。私も出来どころで髪を染めてみたけれど、だからといって何も変わらない。

そうやって、みんなと同じということに慣れて、いやそれが当たり前だと気づいて、ふと嫌になった。



母は私のことを「いい子」だと言った。でも母の中では一番じゃない。それは弟が持っている。

気が早いのか周りに焦らされたのかももう大学の話をし出し、かと言ってプレッシャーはいけないと思っているのか自分と同じ大学に行く必要はないのよ、と言い出す。

構われていないわけではない。愛されていないわけではない。

だけど、満たされることもなかった。

対して父は何も言わない。仕事で疲れてるのかもしれないし、いわゆる年頃の娘ってやつを難しく考え過ぎなのかもしれない。だから私も何も言わない。言って余計に疲れさせたら、困らせたら、それはそれで申し訳ない気持ちになる。

学校から帰るとき、若葉が芽吹き出した桜をよく見上げた。

一気に花だけを咲かせて、散らさないと葉を出せない桜。花と葉が会えないのは彼岸花もだっただけ、と思いながら、その両者の扱いの違いに苦笑してしまう。

たぶん私は桜みたいになれない。かといって彼岸花みたいにもなれない。

何も変わらない。学校と家とを行って帰ってしてるだけの毎日。時折友達とカラオケに行ったりカフェに行ったりして、だらだらと時間を過ごしているだけの日々。

私って、なんだっただけ。

そう思えば虚しくなるから、考えないようにした。

私って、何がしたいんだっけ。

そう考えれば進路を期待する母の顔が浮かぶから、思わないようにした。

緑でいっぱいになった桜は、校門に日陰を生んだ。葉の隙間から零れる光が、たんぽぽを照らしていた。

空を仰げば、私の名前がそこにはあった。眩しいぐらいに、私とは似ても似つかない明るさで。



星空、花火



「花火でも、するか」

夕食後、何やら塞ぎこんでいた姪っ子にそう声をかけると、彼女は困ったような笑みを浮かべた。

姉に何か言われたか、と思ったもののそれは追求できない。

姪は六時を過ぎた頃、きちんと帰ってきた。即座に姉が部屋から飛び出してきたのは言うまでもない。そのことに姪は少々面食らった様子で「ごめんなさい」とだけ言っていた。

「あー、すごいのはないんだ。線香花火ぐらい」

夏休みは子どもにと花火を買う客が多い。うちは大量に入荷することをしないから、既に大半が売れていた。みんなわかっている、というやつだ。あとは車を出して買いに行く。

「姉貴……お母さんは今風呂だろうし、今のうちだろ」

まだ立ち上がらない姪にそう言ってみると、ようやく「そうだね」と笑った。ゆっくりと立ち上がり、共に店へと降りる。

線香花火を一袋だけ取って、鍵を開けて外へ出た。

夏の夜は、嫌いじゃない。暑いことには変わらないし、寝苦しいこともほぼ毎日だ。だけど、やっぱり星が綺麗で、見上げればいつだってそこにある。

「うわぁ」

俺につられたのか顔を上げた姪が零した。田舎と都会じゃ、星の見え方が違うのは俺も経験済みだ。もっとも、都市部で全く星が見えないことに驚いた方だが。

バケツに水をくみ、花火の袋を開ける。ポケットからライターを取り出すと「花火、久しぶりだな」という声が聞こえた。

静かに持つその先に、そっと火を当ててやる。

ぱちぱちという音が、静かな田舎に響いた。灯りの乏しい庭に、鮮やかな花が散る。

火薬の匂いが鼻をかすめる。

姪は落ちついたその性格ゆえか、上手に火花を最後まで散らしていた。ひとつ終えて、バケツの中へ。そうしてまたひとつ、花を咲かせる。

「私ね」

その明るい花を見つめたまま、彼女は口を開いた。

「森のおばけに会ったんだ」

迷子になったときか、と聞こうとして口を閉じた。彼女の瞳は自分の手の先だけを見ていた。



「どうして忘れてたんだらう。今でもはっきり覚えているのに。最初に見たときは、ちっとも気づかなかった。昔と何にも変わらなかったのに」

ちりちりと最後の命を輝かせ、火種は地面へと落下する。

「感謝、してるつもりだったのかな」

次の花火を手にとらず、姪は顔を上げた。暗闇の中でも、その悲しそうな瞳だけはよく見えた。

「見た目が、重要じゃなかったってことだらう」

「え？」

「十歳のお前にとっては、大事だったのは森のおばけの見た目じゃなくて、出会って助けてもらったってことだったんだらう」

どこかの家の犬が、鳴いた。

「そう、なのかな」

「さあなあ、俺はその森のおばけを知らないし」

ほら、と線香花火を渡してやると、彼女は受け取る前にかざごととショートパンツのポケットを探りだした。

「森のおばけは、おじさんのこと知ってたよ」

そしてそこから何かを取り出し、俺の方に手を出す。

「これ、渡して、って頼まれた」

言われるがままに出されたそれを受け取ってみたものの、何を言っているのかがさっぱりわからなかった。

手の上に乗ったのは、細い紐のようなもの。

「これが切れたら、もういいんだ、って思って」

姪の声が、別人のように聞こえた――優雨のように。

「そう言った。詳しいことは知らないし、聞かなかった。だけどすごく真剣だったから」

ああ、そうか。聞こえないようにつぶやいて、手のひらのものを握り締める。

「森のおばけには、バス停で会ったのか」

俺の質問に、彼女は黙ってこくん、と頷いた。

頭ではわかっているけど、出来ない俺を。

諫めることもせず、付き合っていてくれた彼女は。

そうやって優しく、俺を付き放してくれるんだ。

「そのミサंगा、結んであげる」

彼女が何を聞いてきたのかはわからない。だけどそれを俺が聞いてしまったら全て台無しになってしまう気がしたから。

俺はそれを姪に渡し「頼む」と右腕を付き出した。



星のいのち、きらきら

「自分の名前、変だって思うことあるか？」

線香花火が全て終わる頃、おじさんは唐突にそう聞いてきた。それまでは何か考えていたのか、ずっと無言だったのに。

最後の花火が大きな火花を散らしている間は、黙っておいた。弾けて消える音に耳をすませて、不思議な模様を咲かせる花を見つめていた。

ぽとり、小さくなったオレンジ色の玉が落ちる。

「思うこと、あるよ」

それから一拍待って、そう答えた。

おじさんはライターをしまって「そうか」と呟く。

「その名前な、俺が原因なんだ」

きっと母がお風呂から上がったのだろう。家の中からおばあちゃんと何か話している声が聞こえる。

「おじさんが？」

「そう。産まれたって連絡が来て、店閉めて会いに行ったんだ。母親は既につきそってたから、ひとり車を飛ばしてな。やっぱり新しい家族が産まれたってのは嬉しかったんだろうな、俺の子じゃなくても」

しゃがむのを止めて、おじさんの隣にあった石に腰を下ろした。

「もう夏も終わりそうな日で、驚くほど空が青くてな。なのに病院に着いた途端大雨。姉貴が『あんたが雨を連れてきた』とか言い出して『この子は雨じゃない、青空だ！』って」

「それで、青空？」

おじさんは苦笑いを浮かべながら肯定した。花火の明るさから、夜の暗さに目が慣れてきたらしく、その右手首にあるミサンガがよく見える。

「俺が雨に変な感情持ってたから、躍起になったんだろうな」

そういったおじさんは、ゆっくり空を仰いだ。私も一緒に空を見上げる。きらきらと、どこもかしこも星、星、星。夜空がこんなに明るいななんて、思ったこともなかった。

「好きだった？」

それだけ、聞いてみた。なんとなく、ほんとうになんとかなくけど、あまり踏みじっちゃい

けないような気がした。

「ああ、そうだな」

桜の花びらのように。一面に広がる、淡い淡い消えそうな絨毯のように。

しばらく、無言だった。相変わらず家の中から母の声は聞こえてくる。私の名前も聞こえるから、きっと探しているのだろう。

でも、まだ戻りたくはなかった。どうしてか。



星しかない空を見上げる。きらきらと瞬くそれが、実は遠い遠い昔に輝いたものだと知ったのはいつだっただろう。今見ている星が、今ないかもしれない事実。死んでるかもしれないのに、まだ私の目には輝いてみえる現実。

どこかで犬が鳴いた。呼応したのか、別の犬も鳴いた。

夏の夜は、そうやって、静かに時を刻んでいる。

「おじさん、高校生のとぎって楽しかった？」

そのままの体勢で聞いてみる。不思議と首は疲れない。

「どうだろうな。だけど、やけに懐かしいよ、今となっては」

きっと見たいものがあるからだ。

「毎日、同じでも？ みんなと、一緒でも？」

流れ星がきらり、落ちてゆく。

「それが嫌なら、動くしかない。待ってたって何も変わらない。だけど、変わらないってのもなかなかいいもんだ」

願いごと三回。言えるはずもなかった。

「ほんとう？」

顔を下げた聞いてみる。

「さあなあ。俺は見事に変わらないことに終止符を打たれたしな」

目線を合わせてくれたおじさんは、そう言って右手首を上げて見せた。その顔がちょっと明るかったので、ほっとしてしまう。

「いつか、聞かせて。その話」

手首に向かって言う。おじさんは眉尻を下げて「そうだな。大人になったらな」と言ってくれた。

いつ、大人になるかなんてわからない。私は高校に入学したばかりでまだまだ子どもだ。だけど森のおばけは私と歳が近かったから、きっとそうだから、その日はそう遠くないと思っている。

二十年ぐらい前、私と同じ年ぐらいの女の子は、何を考えてこの人の隣にいたのだろうか。

聞いてみたいけれど、たぶん、ううん、きつともう会えない。



「夏休み終わったら、また学校かー」

飛んできた蚊をぱちん、と叩く。失敗。

「学生のうちに、したいことしておけよ」

ぱちん、横で音がした。どうやら成功したらしい。

「うーん、そんなの、ない」

「ない？」

「だって、高校、つまらないし」

いつの間にか、おじさんとは普通に喋れるようになっていく気がした。それはおじさんも、一緒なのかもしれない。

「それはお前がつまらないと思ってるからだろう」

突如頭をくしゃくしゃにされ、首をすくめてしまう。

「こんな田舎に比べたら、飽きることなんてないだろうよ」

おじさんの声が、ワントーン、明るくなった気がする。

「何でもあるから、飽きるのも早いんですー」

そう言い返してやると、頭の上の手のひらが止まった。「わかったような口聞くなよ」そんな声が頭上から聞こえてくる。

「何にもないさ、こんな田舎。あるのは山と川と、空だけだ」

だけどその声はちっとも寂しそうでも悔しそうでもない。寧ろ誇らしげだ。

「そんなことない、森のおばけがいたんだよ」

私の言葉に、おじさんが優しい笑顔を向けてくれた。

「そうだな。森のおばけはいたんだよな」



夕立、バス停、出発地点



雨が垂れていた。

トタンを打つ雫が音を奏でる。ド、ミ、ラ。不規則な音階は軽快なテンポで頭上を滑る。

梅雨も明けてからの雨。遠くに見えた入道雲が降らせた夕立。バス停には俺ひとりで、ついでにいうところの停留所にはあと一時間ぐらいしないとバスはやってこない。

後ろに鎮座した山は、今日も何かを守っているのだろう。新芽、動物、微生物。俺らの生活との境界線が引かれて、踏み込んで行けない場所となって、変わらない毎日を過ごしている。

雨は地を濡らし、やがて水の流れが俺のつま先にもやってくる。今日はサンダルだ。多少濡れても構わない。突然の夕立は、熱を溜め過ぎる羽目になったアスファルトへの褒美だ。前からは濡れたアスファルトの匂いが、後ろからは懐かしい雨の匂いが沸きたつ。

バス停の小さな屋根。その僅かなテリトリーに身体を収め、雲が去るのを待つ。五分かもしれないし三十分かもしれない。だけどそんなことはどうでもいい。今はただ、雨粒のつくり出すメロディをBGMに空を眺めるだけだ。

「なあ」

いつもの声は聞こえなかった。その姿も俺の目には見えない。優雨。俺の優しい幼馴染。

誰もいない隣に、俺は空を見たまま話しかける。

「ありがとうな、これ」

右手をちょっと上げておく。

返事はない。もしかしたらほんとうにいないかもしれないし、実はいるのかもしれない。でもどちらでも良かった。

「あと青空のことも。まさかお前が助けてくれたんだとは思わなかったよ」

誰もいないバス停。一応バスが走っていても、学校が休みのこの時期は誰もここへはこない。

「姉貴に聞いてみたら、あいつ今でもずっと感謝してるんだってさ」

雨の音だけが、俺の声に応えていた。



夏由くんは悪くないのよ。

お前が一緒だったとしても、違ったかどうかなんてわからないんだから。

そう、何度も何度も言われたのも、もう二十年前のことだ。

わかっている、頭ではどんなに理解していても、女々しいぐらいに心は何も理解できなかった。いや、したくなかった。

あの日、夕立が全て持って行ってしまった日。

代わりに俺が、と考えては、それじゃあ優雨に同じ思いをさせるだけだと頭を抱えた。

一緒に乗っていれば怪我で済んだかも、と考えては、どうにもならないことに痛みを覚えた。

なんで優雨だけが、と思っては、助かった他の人たちにぶつけることは出来ないと、ひとり苦しんだ。

それから二十年。もう、随分と長い年月が過ぎている。

「ありがとうな、優雨。俺に付き合ってくれて」

あの日と同じ夏、夕立の時間。場所はバス停。

雨が、静かになってきた。トタンを打つテンポがだんだんと遅くなり、目の前に垂れる雫も小さくなってゆく。

もうすぐひぐらしが鳴き出すだろう。日が傾いてもすぐに、地面は乾いて匂いを変えるだろう。

夕立がきっと、全て持っていくだろう。

「好きだったよ」

もう誰もいない、ベンチに向かって。二十年以上言えなかった、独り言。

「じゃあな」

古いベンチから立ち上がると、反動でギイと音が鳴った。濡れたつま先がサンダルの中で滑る。俺はゆっくりと、明るくなった世界へと足を踏み出す。屋根のない、晴れた世界に。

「ありがとう」

誰もいなかったバス停から、そんな声が聞こえた気がした。俺は振り返らない。



「おじさーん、またねー！」

目の前の道路を見なれた車が通り過ぎていった。その後部座席から姪っ子が元気よく手を振っている。運転している姉も、ちらりとかちらに視線を寄こしてクラクションを鳴らす。

「おう。またいつでも来いよ。宇治金時、作ってやるから」

ゆっくりと小さくなっていくその姿に言ってやると、まるで「駄目って言ってるでしょ」と言わんばかりにクラクションが長く鳴った。

雲と雲の隙間から、眩しい太陽が地面を照らす。もう夕刻だというのに、その光は陰ることを知らない。

誰もいないベンチを背に、俺は家路へと足を進める。ボロボロで、誰も修理しようとしなないベンチとトタンの屋根。二十年前から、変わらない寂れたバス停。

雨が垂れたその場所は、今でも誰かの出発地点だ。

<了>



破璃の降る降る そのあいだ

<http://p.booklog.jp/book/30900>

2011年7月21日 初版発行

2011年11月11日 改定

著者：八谷鳴

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/skinfaxi/profile>

個人サイト：No.88 <http://no88.bake-neko.net>



感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/30900>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/30900>



電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.

